

教員養成課程をもつ大学における 音楽教育の一考察 (その二)

柏瀬 愛子・佐地 多美
中村 美保子・藤田 まゆみ

A Study on Music Education at Colleges with Teacher's Training Courses (Part II)

by

A. KASHIWASE T. SAJI
M. NAKAMURA and M. FUJITA

はじめに

近年、幼児、児童に対する音楽教育のあり方についての問題が叫ばれていることは、マスコミを通して一般の知るところである。教育界としても強い関心のもとに、多様な研究課題がもたされている。その一つに、子ども達が音楽教育を受ける最初の出会いとなる幼稚園や保育園、あるいは小学校の一般教師（音楽専科卒でない者）の音楽的能力の低さや指導技術のまずさが問われている。この問題を掘り下げていくと、必ず教員養成のあり方に到達する。

文部省で定める免許法基準によれば、幼稚園、小学校教員となるために必要な音楽に関する、総学習単位数はわずか4単位でよい。多くの養成機関ではこれを少ないとして、はるかに上回る単位数をおいて教育していることは、前報で報じた通りである。にもかかわらず、技能の低さが問題となるのは、なぜなのだろうか。多くの教員養成校や音楽大学においても、調査、検討がくり返されている。

本学においても、この問題を取り上げ、音楽授業方法についての改善案をもつに至ったことは前報に述べた通りである。本報では、これを一部学生に対し実施してみた結果を述べ、更に今後の課題について考察をしてみた。

I 改善案に基づいた研究授業について

A 実施した改善案

<器楽(ロ)案> ピアノソルフェージュとピアノレッスンを併用し、進度別に指導する。

B 対象とした学生

児童学学生41名(昭和48年度入学)

C 実施期間 48年度後期(48, 10~49, 2)

D 方法

1 グループ分け

1年児童学の前期担当教官(常勤4名)が、自分の担当していた学生に対し、進度(基準条件をおく)、普段の練習態度、理解力、努力などからみた4段階の評価(A, B, C, D)を

つけ、各段階別の4つのグループに分けた。

a) 基準とした条件(その一)

Aランク——入学時すでに経験をもち、練習曲集の段階中級に達している者(ツェルニー30番, 40番)

Bランク——入学時すでに経験をもち、練習曲集の段階初級上位の者(ツェルニー100番)

Cランク——入学時には未経験であるが、前期に進度が優れ努力する者(バイエル70番以降)

Dランク——入学時に未経験であり、前期に進度が遅滞し努力が見られない者(バイエル)こうした条件に従ってクラス分けをしたところ、各ランクの該当者数が次のようになり、人数のアンバランスが生じた。 Aランク 5名, Bランク 8名, Cランク 13名, Dランク 15名。

一教官が、一コマ(90分)の中で指導できる人数には制限がある。そこで、調整の必要性から、先の条件(その一)に対し手直しを加えた。

b) 手直しするとき基準とした条件(その二)

Aランク——練習曲集の段階中級者、およびBランク、初級上位者の中より、普段の練習をよくし、進度の早い者をくり上げる。

Bランク——練習曲集の段階初級上位者、およびCランクより努力する者をくり上げる。

CおよびDランク——進度のみで分けないで、平常の練習態度に重点をおくことにした。ただし、練習曲集の進みがとみに遅れている者(4名)は、平常努力をしている者であっても、Dランクとする。

この条件に従ってバランスをもった人数配分となるよう協議検討の結果 A 10名, B 11名, C 10名, D 10名とした。

2 グレード別レッスン実施にあたって、教師間で申し合わせた事項

a) 各グループとも、技能に応じた教則本での練習は従来通り続けていく。

b) 理論の裏付けとなる課題を与える。

c) 教師間で課題の事前研究をする。

<課題> ①楽曲分析(アナリーゼ) 楽曲の構造を研究する一方法で、これを理解することによって、歌曲の簡易な伴奏付けの知識をもつことができる。(バイエル教則本のNo.3~30までの練習曲を使う) ②和音伴奏と変奏, ③弾きながら旋律唱をする。なお、グループによっては、多少の幅をもたせる。

3 実際指導の過程

a) AおよびBグループ

① 従来通り練習曲集、副教材集による基礎的ピアノ奏法技術の習得を行なう。

② 課題として使用した曲(バイエルNo.7, 8, 10, 11, 15, 16, 19, 24, 27, 28, 30, 31)

1) 和音記号と非和音を記入する。

2) 主旋律に和音伴奏および分散和音伴奏をつけて弾く。

3) 楽譜通りに弾きながら、右手(又は左手)の旋律を歌う。

4) 右手(又は左手)の旋律を弾きながら、左手(又は右手)の旋律を歌う。

5) 右手(又は左手)の旋律を左手(又は右手)で弾く。

6) 右手(又は左手)の旋律を左手(又は右手)で弾きながら、左手(又は右手)の旋律を歌う。

7) 右手の旋律を歌うグループと左手の旋律を歌うグループに分かれて合唱する。

8) 7) のことを左右交代して行なう。同様に、二人組でも行なう。

b) Cグループ

① 従来通り練習曲集による基礎的ピアノ奏法技術の習得を行なう。

② 課題による学習

課題として使用した曲（バイエル№7, 8, 10, 11, 15, 16, 19, 24, 27, 28）

1) 和音記号と非和音を記入する。

2) 主旋律に和音伴奏および分散和音伴奏をつけて弾く。

3) 楽譜通りに弾きながら、右手（又は左手）の旋律を歌う。

4) 右手（又は左手）の旋律を弾きながら、左手（又は右手）の旋律を歌う。

5) 右手の旋律を歌うグループと左手の旋律を歌うグループに分かれ合唱する。

c) Dグループ

① 従来通りバイエルによる基礎的ピアノ奏法技術の習得〔受験資格（試験を行なう12月までにバイエル80番以上となる）に達するよう努力させる〕

② 課題による学習

課題として使用した曲（バイエル№7, 8, 9, 10, 11, 15, 16, 19, 24, 27）

1) 和音記号と非和音を記入する。

2) 和音記号名を言いながら、主旋律に和音伴奏をつけて弾く。

3) 楽譜通りに弾きながら、主旋律を階名で歌う。

4) 右手（又は左手）を弾きながら、左手（又は右手）の旋律を歌う。このとき左手（又は右手）で膝を打ち拍をとる。

5) 右手の旋律を歌うグループと左手の旋律を歌うグループとに分かれ合唱する。（音程の違い、息の使い方、フレーズ等に注意する）

以上がグループ別指導内容の大略である。

E 指導結果から見た考察

前述の指導結果から、今後の問題提起をするため各グループ別に考察してみた。

Aグループ 一応ピアノ経験者ばかりなのでレベルが高く、課題内容の理解は早かった。しかし、ごくわずかな練習で完成するという安易な気持ちから、課題演習に対する真剣さが見られなかったのと、弾き歌いの「歌う」ことの方が多少不得意といった感が見られた。

Bグループ 経験者、未経験者がいたが、未経験者といっても進度が早い者たちなので、経験者と差がつくということはほとんどなかった。課題についても初めてということ、最初は手こずっていたが、すぐ慣れだいたい習得されたようである。このグループについては理論と実際との結びつきが一応もたれ、多少の効果がみられたと思う。

Cグループ、Dグループ この両グループは未経験者がほとんどであるためレベルとしての差もなく、グレード別を実施するにあたって、一番気づかった学生たちの劣等感も全く見られなかった。これは、自他共に自分の技術、能力を知っていることによるものと思われる。課題は実際を通して理解してゆくため、理論との結びつきをもち、応用することも知ったようである。しかし、基礎的なピアノ技術の遅れから、課題の実習演奏となると少々困難な学生もわずかではあったが見られた。弾き歌いに関しても他のグループと同様、最初はかなりとまどっていたが、慣れるに従ってできるようになり、エチュードのみで技術習得を目ざしていたときよ

り学習意欲をもちだした感が見られた。

このように各グループ毎の考察から引き出された問題は、

- 1 グレード別に課題の教材、内容を変えた方がよいのではないか。
 - 2 弾き歌いの早期指導（ソルフェージュを含む）を行なった方がよいのではないか。
 - 3 エチュードによるレッスンと課題レッスンとの時間配分を考え直す。
- などである。

Ⅱ 改善案による授業実施に対する反応調査について

器楽「口案」の半期間の実践を通して、教師側が発見した問題点と学生側から出てきた意見とを合わせて熟考し、改善案の充実を計るため、教師および学生たちのこの案に対する受けとめ方を調査しまとめてみた。

A 教師側の調査から

1) グレード別に対して

- イ) 指導しやすかった 3
- ロ) 指導しにくかった 1

グレード別にするレベルが同じになるので指導しやすくなるが、手間がかかりすぎるというグループもあった。

2) 課題の内容を総合的にみたとき

- イ) 適当であった 2
- ロ) 不適当であった 2

不適当と答えたなかには、簡単すぎてあまり効果がなかったグループと、一応理解はできて、テクニックの遅れがあるため実習が少々困難だったグループとがある。

3) 課題を内容別にみたとき

イ) 和音分析

できた	4	適当	2 (C, D)
できない	0	不適当	2 (A, B)

ロ) 和音伴奏

できた	4	適当	2 (C, D)
できない	0	不適当	2 (A, B)

ハ) 分散和音伴奏

できた	3	適当	2 (B, C)
できない	1	不適当	1 (A)

ニ) 左右の交換

できた	2	適当	0
できない	0	不適当	4

ホ) 弾き歌い

できた	4	適当	2 (C, D)
できない	0	不適当	2 (A, B)

4) 課題レッスンと普通レッスンを同時に行なうことに対して

- イ) よかった 0
- ロ) 悪かった 4

同時というのは、同じコマの中で2通りのレッスンを行なうことである。どちらのレッスンも中途半端となりがちで、そうさせないためには時間延長をすることになる。

教師側の調査から言えることは、前述の問題点として指摘した事項と同じである。なお、グレード制は指導しやすいと言う意見が強く、効率的にもよいので、これから踏み切るべきではないかと思う。

B 学生側の調査から

1) グループを組みかえたことをどう思ったか。

- イ) よかった 29 (70.9%)

同程度の集まりであるためお互いに勉強しあえ、競争心がわき励みになった。

- ロ) 悪かった 4 (9.7%)

自分と同じ程度か下手な者ばかりで勉強にならなかった。

- ハ) その他 8 (19.4%)

どちらでもないという答と無記入。

2) 課題をもったレッスンをどう思ったか。

- イ) 楽しかった 4 (9.7%)

エチュードだけのレッスンより変化があり考える力がつくような気がした。理論が理解できた。

- ロ) 楽しくなかった 15 (36.6%)

一度やった曲であるため新鮮味がなく、やる気になれなかった。バイエルはつまらない

- ハ) 負担になった 21 (51.2%)

進度が遅れているのに余分のことまでしなければならず、時間に余裕がないのであせった。

- ニ) その他 1 (2.5%) 無記入

3) 課題の内容をどう思ったか (この項については学生の意見を要約しまとめたものである)

- イ) アナリゼの必要性はわかるが、バイエルで行なったことに疑問をもった。

10 (24.4%)

- ロ) バイエルで伴奏付けの練習をするより、楽しめる楽曲を使ってほしかった。

30 (73.1%)

- ハ) その他 1 (2.5%) 無記入

この学生側の調査からも、グレード制に対しての賛成や、バイエルで課題教材を指定したことのまずさ時間不足などがあげられ、教師側の意見(問題点)と一致するに至った。

結局「ロ案」は本質的にはよいが、課題内容やその与え方などについて、再考慮の必要性があるということになった。

Ⅲ 今後の考察

本学における「器楽」が今まで以上の成果を上げるため、先に述べた3つの問題点（グレード、教材、実施法）を元にして、さらに考察してみる。

グレード制に関しては、教師と学生の両者から賛成意見を得ることができたし、又、グレード制を実施してかなりの成果を上げている大学の例もあるので、本学においても実施する方向で今後検討していきたい。

教材においては、アナリーゼはバイエルを使用し、弾き歌い、伴奏付けには幼児歌曲、小学校の共通教材などを使用することが望ましいであろう。伴奏付けは既成の伴奏が書かれている楽譜を使用するだけでなく、単旋律のみ書かれたものを用意したい。そうすることによって、アナリーゼ（理論）と伴奏付け（実習）の結び付きが本当に理解されるのではなからうか。

今までの「器楽」の指導は基礎的ピアノ奏法に重点が置かれていたが、さらに理論との結び付き、初見力の養成などを加味し、現場で役立つ真の実力を体得させたいものである。

次に、上記のグレード、教材とさらに実施法（時間配分）の問題点を考え合わせた改善案を述べてみる。

1年次ではバイエルを使用し、基礎的ピアノ奏法を十分に習得させると共に、随時、音階、和音も実習させて「理論」との結び付きを完全に習得させ、2年からの伴奏付け、初見などの課題へ無理なく移行させたい。

2年次は、基礎的ピアノ奏法習得のための練習曲として、ツェルニー100番を使用する。前期の課題は「進行曲粹」からその学生に相当と思われる任意の曲を移調させ、音階、和音などを含む調性感を「理論」と完全に一致させる。

後期は伴奏付けと弾き歌いを課題とし、主に幼児歌曲を一週間前に与えるが、その課題は前に述べた通り、既成の伴奏が付いているものを初期に与え、そのあと学生自身が伴奏部分を書き込む楽譜を与える。ほかに単旋律の初見をさせ、楽譜を即座に理解、演奏できる力も養いたい。

3年次はツェルニー100番から30番を練習曲とし、前期の課題レッスンは、主に小学校の共通教材を伴奏付け、弾き歌いする。2年次と同様、一週間前に与えるが、除々に初見で伴奏付け、弾き歌いできる力も習得させたい。それには、複旋律の初見も平行して実施することが望ましい。3年間の総仕上げとして、任意のピアノ曲演奏を後期の課題とする。

具体的な実施法としては、ピアノレッスンと課題レッスンを隔週に行ない、それぞれに十分な時間をかけて徹底的なレッスンにする。合わせて、前述のグレード制を課題レッスンに採用することは、より一段と効果を上げるように思われるので、今後さらに検討していく。

要 約

音楽的感覚は幼児期から児童期にかけて顕著に発達するため、その時期の音楽教育は重要である。それにもかかわらず、音楽教育に対して多大な関心が寄せられている今日、十分な指導技術や指導力を持たない学生を幼稚園、小学校に送り出すことは、教員養成に携わる我々にとって、実に憂慮すべきことである。

そこで豊かな音楽性を持つ教師を育てるために「どのような音楽教育をするべきか」という考えに基づいて、「器楽」の改善案を進めた結果、次のようなことが明らかになった。

- 1) グレード制については、教師、学生両者の賛成が得られた。
- 2) 課題レッスンの教材は、バイエルのほかに簡単な歌曲などを使用した方がよい。
- 3) ピアノレッスンと課題レッスンの時間配分に無理があった。

以上のことを考慮してさらに練り直した結果、次のような改善案を示した。

- 1) 1年次はバイエルを使用し、音階、和音の課題も盛り込む。
- 2) 2年次はツェルニー100番。マーチの移調、主に幼児歌曲の伴奏付けと弾き歌いを課題とし、合わせて単旋律の初見課題も行う。
- 3) 3年次はツェルニー30番。主に共通教材の伴奏付けと弾き歌いを課題とし、合わせて複旋律の初見課題も行う。

本年度は実験授業を中断しているが、上記の改善案をさらに熟考し来年度から実施の予定である。その結果は次の機会に報告させていただく。

参 考 文 献

- 1) 堀味正夫他：名古屋女子大学紀要20, (1974) 教員養成課程をもつ大学における音楽教育の一考察